日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No.10, 169-180 (2009)

『旅の仲間』に見る色彩表現の機能と効果
―人物描写の場合―

川原　有加
日本大学大学院総合社会情報研究科

The Relationship between Character Descriptions and the Use of Different Kinds of Colors in *The Lord of the Rings*
―Chiefly on *The Fellowship of the Ring*―

KAWAHARA Yuka
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper is a study of the relationship between character descriptions and the use of different kinds of colors in *The Fellowship of the Ring*, which is the first volume of *The Lord of the Rings* written by J. R. R. Tolkien. He used good techniques in his stories. One of them is depiction of characters and nature by the use of colors. In this story, there are many scenes which feature the characters by the use of various colors. Colors as a whole work very effectively in the sense that they can enhance representation of characters and symbolize some themes. An exhaustive analysis of color description in *The Lord of the Rings* shows a major lure to attract lots of readers in the world.

序

J. R. R. トルキーンは言語学者であるとともに大部のファンタジー作品を世に送り出したファンタジー作家である。彼の代表作『指輪物語』（*The Lord of the Rings*, 1954-1955）は、今でもなお世界中で人気を博している。この物語は、『旅の仲間』（*The Fellowship of the Ring*, 1954）、『二つの塔』（*The Two Towers*, 1954）、『王の帰還』（*The Return of the King*, 1955）の三部より成る連作ファンタジーである。トルキーンは、作品構成や作品展開を綿密に企て、様々な物語技法を駆使している。本論文では、『指輪物語』の第一部『旅の仲間』に関する物語技法のうち、特に色彩の描写を中心として物語におけるその機能と効果を考察していく。

１．『旅の仲間』のプロット

ホビット（hobitt）のビルボ（Bilbo）の誕生日の祝会が開かれる。ビルボはこの日を機に旅に出ることを決意していた。彼の甥で養子のフロド(Frodo)はビルボが残していった指輪を譲り受ける。フロドは、魔法使ガンダルフ（Gandalf）から指輪についての話を聞く。その指輪は、ビルボが昔、旅に出かけたときに沼に住むゴラム（Gollum）となぞなぞ対決で勝利し獲得したものであった。だが、その指輪は邪悪な指輪であることが分かり、やがてフロドは滅びの山の亀裂へその指輪を投げ込みに行く決意をする。

しかし、その指輪を鍛造した邪悪な冥王サウロン（Sauron）とその配下の者たちが狙っていた。フロドはホビットのサム(Sam)、メリー（Merry）、ピピン（Pippin）とともに指輪を持って旅に出る。途中、黒の乗手たち（the Black Riders）の気配を感じながら、恐ろしい古森や塚山丘陵を超えていく。その時彼らを救ったトム・ボンバディル(Tom Bombadil)に宿屋の「躍る小馬亭」に行くことを勧められる。「躍る小馬亭」では、アラゴルン（Aragorn）がホビットたちを観察していた。フロドたちはガンダルフが残していた手紙でアラゴルンのことを知り、彼と一緒に旅をすることになる。一行はエルロンド（Elrond）

の「最後の憩」館を目指して旅を続けるが、途中、フロドが黒の乗手に襲われ、負傷する。その後、風見が丘で出会ったエルフのグロールフィンデル（Glorfindel）に案内され、「最後の憩」館に到着する。そこでフロドは傷の手当てを受け、旅に出たビルボやガンダルフに再会したり、美しいエルロンドの娘アルウェン（Arwen）に出会う。また、指輪に関する会議が開かれ、9 人の〈旅の仲間〉が結成される。〈旅の仲間〉のメンバーは、フロド、サム、メリー、ピピンに加え、人間のアラゴルンとボロミア（Boromir）、ドワーフのギムリ（Gimli）、エルフのレゴラス（Legolas）、そしてガンダルフである。彼らは滅びの山に向かうため「最後の憩」館を後にする。モリアの坑道において、ガンダルフが怪獣バルログ(Balrog)と戦っているうちに橋から転落する。ガンダルフを失った一行は、エルフの国ロスロリアンにおいて、王ケレボルン（Celeborn）や女王ガラドリエル（Galadriel）に面会し、しばらく休息する。フロドとサムは、ガラドリエルの銀の水盤を覗き込む。それは、過去、現在、未来を映し出す水盤であった。ロスロリアンを出発する際、一行はそれぞれガラドリエルから贈り物を受け取り、再び旅を続ける。途中、何かに見張られている気配を感じる。それはゴラムであると皆は推測する。やがて〈旅の仲間〉は進む道の選択に迫られる。フロドは今後の進路を考えていたところ、ボロミアがフロドの持っている指輪を奪おうと襲いかかってくる。指輪はボロミアの手に渡らなかったが、フロドは危険を感じ、一人で滅びの山への旅を続けることにする。

２．物語技法

『指輪物語』には様々な物語技法が見られる。たとえば、指輪はビルボがゴラムから手に入れたという遡及的記述による前作『ホビットの冒険』(*The Hobbit,* 1937)との連続性の確立、また、ゴラムの気配の記述、『二つの塔』で明示されるガラドリエルの贈り物の提示、『王の帰還』でアラゴルンと結婚するアルウェンへの言及などは物語の伏線となっている。数字、方角、植物などのシンボリズムが使用されている。また、黒の乗手たちの追跡や襲撃、不吉な場所と言われる古森や塚山丘陵に入って行く場面、ガンダルフの行方などにはサスペンス的要素が見られる。劇的アイロニーは『旅の仲間』の最終章でボロミアがフロドの所持している指輪を奪おうとするが、それまでのボロミアの視線はフロドに不安を与え、読者だけがそのことに気づいている場面である。さらに、『旅の仲間』における物語の引き立て役として最も重要な人物はトム・ボンバディルである。彼は森の中で楽しく生きていて、指輪の力にも影響されることがない人物である。また、『旅の仲間』ではたくさんの歌（詩）が挿入され、構成的にリズミカルで少し違った雰囲気を醸し出しているが、それは歌が好きなトム･ボンバディルが登場する場面に多い。

このように様々な物語技法が使用されている。その中でも特に色彩の使用に関する物語技法は、人物描写や自然描写にわたって頻繁に使用され、物語展開に効果的役割を果たし、直接的にあるいは間接的に物語の主題と関連づけられている。まずは、物語の主題を整理し、その上で色彩の使用に関する物語技法について考察する。

３．多種多様な主題

『指輪物語』は三部より成る長編物語であるため、様々な場所が舞台となり、実に多くの人物が登場して複雑な構成である。しかし、主要登場人物のフロドに焦点を定めると、フロドの旅と内的外的闘争の物語ということが前景化してくる。

この物語が展開していく上で主軸となっているのは、邪悪な魔法の〈指輪〉の存在である。指輪を棄却する旅の中で、フロドは様々な場所に立ち寄り、多くの人々に出会い、彼らに助けられながら、敵や悪天候や悪条件など多くの困難に立ち向かって旅を続け、フロドと彼を取り囲む他の登場人物たちは様々な出来事に遭遇し、精神的に道徳的に成長を遂げていくのである。

また、指輪を所持しているフロドと指輪の存在を知っている登場人物たちの内的闘争は物語の主題と明確に結びついている。それは、善と悪を中心として賢慮、知恵、正義、節制、勇気、希望、愛の七つの徳や高慢、嫉妬、憤怒、怠惰、貪欲、大食、色欲の七つの大罪、その他誘惑、裏切り、救い、憐れみ、復活、信頼、友情など多種多様で、幾重にも表れて

いる。『指輪物語』は、旅の軌跡を基盤として、物語の主要登場人物であるフロドと彼が所持している〈指輪〉を通してフロドの内的外的闘争において物語の主題が提示されている冒険物語なのである。

これらを効果的に表現するために、トルキーンは、巧みな物語技法を多用しているが、その中でも、色彩の表現に関する技法は際立っている。

以下、『旅の仲間』において、特に人物描写における色彩の使用を中心として具体例をあげながらその機能と効果を検証していく。

４．人物描写における色彩表現

『旅の仲間』では多くの人物が登場する。そこで、主な登場人物の最初の登場場面を中心に登場順にその色彩的な特色を整理しながら検証を進めていく。

(1)ホビット

物語の主要登場人物はホビットであるが、『旅の仲間』において、物語の中心的な登場人物となるホビットのフロド、サム、メリー、ピピンの登場場面には詳細な色彩描写は見られない。しかし、ホビットの容姿に関しては、『指輪物語』の前作『ホビットの冒険』と『旅の仲間』の序章「ホビットについて」に記述がある。

> They are inclined to be fat in the stomach; they dress in bright colours (chiefly green and yellow); wear no shoes, because their feet grow natural leathery soles and thick warm brown hair like the stuff on their heads (which is curly); have long clever brown fingers ….(H 4)[1]

また、『指輪物語』序章「ホビットについて」には次のように記されている。

> They dressed in bright colours, being notably fond of yellow and green; but they seldom wore shoes, since their feet had tough leathery soles and were clad in a thick curling hair, much like the hair of their heads, which was commonly brown. …Their faces were as a rule good-natured rather than beautiful, broad, bright-eyed, red-cheeked, with mouths apt to laughter, and to eating and drinking. (11)

『ホビットの冒険』において、トルキーンが創作した生物「ホビット」が初めて登場する。まずは、最初に衣服の色を描き、その後、ホビットの特色である足に関する描写がある。ホビットは足の裏が硬いため、靴をはかないが、それは、ホビットの世界の大地が美しく安全であることを暗示している。続いて、髪の毛、指の描写となる。ホビットの身体に関わる色彩的特色を見てみると、衣服は明るい色彩のもので、‘yellow’と‘green’を好んでいる。‘green’は『指輪物語』だけでなく、トルキーンの他の作品の登場人物の衣服の色としても使用され、トルキーンが特別な思いを示していた樹木を連想させる色である。緑には当時、樹木が破壊されていたことを嘆いていたトルキーンのメッセージが込められているとも考えられる。彼らの髪の毛や頬の色は人間と同じで、これは、ホビットが読者にとって身近な存在となるようにしているのである。

『旅の仲間』においてホビットたちの登場場面に色彩表現が見られない理由は、ホビットの姿が『旅の仲間』の序章で提示されているので、すでに読者に了解され、身体の色彩的な特色が人間により近い生物であることが明確であり、あえて色彩描写の必要性がなかったからであると考えられる。

(2)ガンダルフ

ガンダルフは『旅の仲間』で最初に登場したときからその装いで彼を連想させるようにされている。

ガンダルフが登場する最初の場面の描写である。

> He wore a tall pointed blue hat, a long grey cloak, and a silver scarf. He had a long white beard and bushy eyebrows that stuck out beyond the brim of

[1] 本論文において *The Hobbit* および *The Fellowship of the Ring* からの引用は J. R. R. Tolkien. (*The Hobbit.* Boston. Houghton Mifflin Company, 2001）［略語（H）］と J. R. R. Tolkien.（*The Fellowship of the Ring*, Second Edition. Boston: Houghton Mifflin Company, 1982）に依拠し、引用ページ数は括弧内に記す。

his hat. Small hobbit-children ran after the cart all through Hobbiton and right up the hill. It had cargo of fireworks, as they rightly guessed. (33)

ガンダルフは長いマント grey cloak（灰色のマント）を着て子供たちの前に現れる。マントの色である灰色は、ガンダルフが老人であることを連想させ、何か弱々しい印象をかもし出している。しかし、読者はこのガンダルフを追いかけていく子供たちやホビット庄の人々が楽しみにしている久々の花火の荷物についている大きな赤いGの文字とエルフのルーン文字のラベルからどことなく明るい印象を受ける。また、描写の順序を見ると、最初に老人の服装、そして容姿を描き、その老人の特徴となる荷物に付いているしるしに注目させた後、最後に〈魔法使ガンダルフ〉という名前が提示されている。この方法によって、服装や容姿と名前両者の印象が強調される。

ガンダルフもホビット同様、トルキーン作品の初めての登場は『ホビットの冒険』においてである。

All that the unsuspecting Bilbo saw that morning was an old man with a staff. He had a tall pointed blue hat, a long grey cloak, a silver scarf over which his long white beard hung down below his waist, and immense black boots. (H 6)

『ホビットの冒険』でのガンダルフの様子は、帽子の色や形、マントの色や長さ、スカーフの色、長い白鬚など『旅の仲間』でのガンダルフの姿と全く同じである。これは、『旅の仲間』が『ホビットの冒険』の続編であることを明確にする。一つ異なる点は、大きな長靴をはいている描写があることである。長靴の色‘black’は『旅の仲間』の場合、黒の乗手を象徴する色彩であるために、ガンダルフの色彩として使用することをさけたと考えられる。

『旅の仲間』では‘grey’がこの後二度続けてガンダルフに関係する色彩として使用される。二回目の使用は、誕生日の祝会の場所から突然姿を消し、屋敷に戻ったビルボをガンダルフが訪ねてくる場面である。ガンダルフはフロドの手元にある魔法の指輪をめぐってフロドと言い争いになる。

‘It will be my turn to get angry soon,’ he said. ‘If you say that again, I shall. Then you will see Gandalf the Grey uncloaked.’ He took a step towards the hobbit, and he seemed to grow tall and menacing; his shadow filled the little room. (42)

この場面でのガンダルフは、子供たちの注目を浴びている人気者の老人ガンダルフの面影はない。部屋いっぱいに広がるほどの大きくて恐ろしい威厳のあるガンダルフの姿である。ガンダルフは灰色の衣を脱いで自らの怒りと力を示そうとしている。ガンダルフにとって灰色のマントは重要なものであることがこの場面からも読み取れる。二回目の使用では、Gandalf the Grey（灰色のガンダルフ）という呼び名で使用され、‘grey’がガンダルフを象徴する色彩としてより強くなっており、この後、作品中ではこの呼び名が何度も出て来る。この場面では、‘grey’以外の色は使用されず、ガンダルフの衣以外についても触れられていない。‘grey’とガンダルフの結びつきを際だたせる措置と言える。

三回目の使用は、二回目の使用から続く場面で、ビルボはゴラムから指輪を盗んだのではなく、自分で見つけて手に入れたものであり、自分の指輪であることをガンダルフに主張している。それを聞いてガンダルフは次のように言う。

‘I have never called you one,’ Gandalf answered. ‘And I am not one either. I am not trying to rob you, but to help you. I wish you would trust me, as you used.’ He turned away, and the shadow passed. He seemed to dwindle again to an old grey man, bent and troubled.

Bilbo drew his hand over his eyes. ‘I am sorry,’ he said. (43)

ビルボは指輪が持つ力の一つである意志の強制力により、指輪を所持したいという力に支配されている。ビルボに指輪の力が働いていることをガンダルフは気づく。ガンダルフはビルボに自分を信じるように言い、腰が曲がり、やつれた老人の姿にもどる。

その姿は、二回目の‘grey’が使用されている場面のように威厳があり、力強く、恐ろしいガンダルフの姿とは対照的である。この場面の‘grey’は「灰色のマントを着た」ガンダルフの年老いた姿を強調している。その姿を見て、ビルボは昔のガンダルフの姿とは違う印象を受けるが、ガンダルフが年老いた今でも自分を助け、信頼できる人物であることに変わりがないことを悟り、我に返るのである。

この場面では、ガンダルフの名前は表記されていない。しかし、読者は描かれている人物の様子、風貌、言葉などからガンダルフであることが分かる。このように同じ色彩の連続使用によって、『旅の仲間』における‘grey’はガンダルフを連想させる色として定着を図っているのである。

この場面以降、ガンダルフのことを何度も‘Gandalf the Grey’と提示しているが、それに対して、賢者サルマンが‘Saruman the White’〈白のサルマン〉として登場する。その場面ではサルマンとガンダルフが対話し、そのときもお互いを〈灰色のガンダルフ〉、〈白のサルマン〉と呼び合う。このことで、ガンダルフとサルマンにとって色彩が何か重大な意味を有していることが暗示される。

また、エルロンドの「最後の憩」館の大広間に集まっているとき、そこにいる人々をフロドは目撃して順番に色彩表現を用いて細かく描写している。エルロンドの横に座っているガンダルフの姿の描写は次のようである。

> Gandalf was shorter in stature than the other two; but his long white hair, his sweeping silver beard, and his broad shoulders, made him look like some wise king of ancient legend. In his aged face under great snowy brows his dark eyes were set like coals that could leap suddenly into fire. (239)

‘grey’の使用はないものの白い髪と銀の顎鬚、年輪を刻んだ顔はガンダルフが最初登場した時同様、威厳を帯びている。

モリアの坑道で、ガンダルフは橋から落ちて〈旅の仲間〉から脱落するが、その直前の彼の様子は力強さや威厳がなく、弱々しい老人の姿である。

> …but still Gandalf could be seen, glimmering in the gloom; he seemed small, and altogether alone: grey and bent, like a wizened tree before the onset of a storm. (345)

ガンダルフの姿は暗闇の中の微かな光の中にいる小さく弱々しい老人である。これは、その後よくない出来事が起こる前触れの描写であると考えられる。

ロスロリアンで、ガラドリエルの水盤を覗いたフロドは、白い衣をまとい、白い杖を持ったガンダルフの姿を見る。

> Suddenly Frodo realized that it reminded him of Gandalf. He almost called aloud the wizard’s name, and then he saw that the figure was clothed not in grey but in white, in a white that shone faintly in the dusk; and in its hand there was a white staff. (379)

ここでは、これまでの〈灰色のガンダルフ〉ではなく、白い衣装を身につけ、白い杖を持つガンダルフにおいて彼の不死性を表わしている。と同時に‘white’がガンダルフに関連する色彩であることを明示し、『二つの塔』で再登場する〈白のガンダルフ〉の伏線となっている。

(3)トム・ボンバディル

一行はやがて暗がりから抜け出すが、ピピンとメリーが灰色の柳じじいに襲われる。それを助けたのはトム・ボンバディルであった。トム・ボンバディルの登場場面にも多くの色彩表現が見られる。彼の様子は、不吉な印象を与える古森とは対照的である。

> … and then suddenly, hopping and dancing along the path, there appeared above the reeds and old battered hat with a tall crown and a long blue feather stuck in the band. … stumping along with great yellow boots on his thick legs, and charging through grass and rushes like a cow going down to drink. He had a blue coat and a long brown beard; his eyes were blue and bright, and his face was red

as a ripe apple, but creased into a hundred wrinkles of laughter. (130-131)

トム・ボンバディルの描写には、彼の姿を際だたせ、存在を強調するために細やかな色彩表現が見られる。衣服や身につけているもの、身体の状況の描写はガンダルフの登場場面の描写方法に酷似している。青い帽子をかぶっての登場はガンダルフと同じである。陽の光やトム・ボンバディルの靴、彼の家のカーテンの色である‘yellow’はトム・ボンバディルを象徴する色彩として使用されていると言える。‘yellow’は『旅の仲間』全体では使用頻度は決して高くはないが、集中的な使用によって彼の陽気で明るい性格を表わす色として読者に印象づけている。また、‘yellow’はホビットが好む色であり、彼らがトム・ボンバディルを自分の味方として受け入れることに読者が抵抗感を抱かないようにしている。

(4)ゴールドベリ

トム・ボンバディルはフロドたちを家に招く。すると部屋の奥に彼の妻ゴールドベリが座っている。

Her long yellow hair rippled down her shoulders; her gown was green, green as young reeds, shot with silver like beads of dew; and her belt was of gold, shaped like a chain of flag-lilies set with the pale-blue eyes of forget-me-nots. About her feet in wide vessels of green and brown earthenware, white water-lilies were floating, so that she seemed to be enthroned in the midst of a pool. (134)

ゴールドベリは長い黄色い髪に緑色の長衣を着ている。髪の色‘yellow’はトム・ボンバディルの長靴と同じ色である。また、長衣の‘green’は萌え出たばかりの芦の色であり、森の木々を連想させ、川のむすめとして自然に囲まれた森の中で住んでいることと合致している。また、トム・ボンバディルたちの家の装飾は、‘yellow’と‘green’が多く、森をこよなく愛する彼らを象徴する色彩であると言える。そして、既述したが、両色はホビットの好きな色であり、彼らはトム・ボンバディルたちの家で安心して休息する。さらに、彼女は足許に白い水蓮を浮かばせたいくつかの大きな水盤に取り囲まれて座っている。水蓮の白さは彼女の無垢を象徴している。

(5)アラゴルン

フロドたち一行は、トム・ボンバディルに紹介された宿屋の「躍る小馬亭」に到着する。そこでホビットたちを観察しているアラゴルンに出会う。

Presently, with a wave of his hand and a nod, he invited Frodo to come over and sit by him. As Frodo drew near he threw back his hood, showing a shaggy head of dark hair flecked with grey, and in a pale stern face a pair of keen grey eyes. (169)

アラゴルンは灰色のもしゃもしゃの髪の毛で、灰色の鋭い目をしており、血の気のない顔つきをしている。その姿から、彼の活気のなさや何か心配ごとをかかえているような様子を連想するのと同時に、何かはっきりしない人物である印象を受ける。アラゴルンは一行のことを知っているようであったが、一行はアラゴルンのことを全く知らない。フロドはアラゴルンのそばに近づく。彼が近づいたのは、アラゴルンの威厳を感じとったからである。その威厳はガンダルフの姿と通ずるところがある。サムはアラゴルンのことを信用できるかどうか分からないと言うが、フロドはアラゴルンのことを知らないものの彼を全く信用できないとは思わない。それは、フロドがアラゴルンの姿や様子からアラゴルンの本性を捉えることができたからである。‘grey’はこの場面の中で唯一使用されている色彩であり、その象徴的役割は大きい。そして、アラゴルンに対するフロドの予感は間違っていなかったのである。アラゴルンについては「躍る小馬亭」に残してあったガンダルフの手紙においても詳細が紹介され、その後フロドたちと共に旅を続け、彼らを助ける存在となる。

(6)黒の乗手

『旅の仲間』において、指輪を持っているフロドたちを狙っているのが黒の乗手である。袋小路屋敷で馬に乗って来る者の視界から身を隠したいという

気持ちになったとき、フロドは何かを感じる。

> Round the corner came a black horse, no hobbit-pony but a full-sized horse; and on it sat a large man, who seemed to crouch in the saddle, wrapped in a great black cloak and hood, ….(84)

黒い馬に乗り、黒いマントと頭巾を身につけている姿を見て、フロドは恐怖感に襲われる。このような場面がその後、『旅の仲間』では何度も描かれている。フロドたちは途中、何か気配を感じ、恐怖にまとわりつかれ、逃れようとする。この場面の馬、マント、頭巾のすべての色‘black’は何者かよく分からない、敵を象徴する色として用いられている。

宿屋の「躍る小馬亭」に到着したフロドたちは、黒っぽい姿が門を越えて入ってきたのを見る。しばらくして、「躍る小馬亭」に黒の乗手らしき者がフロドたちを訪ねてくる。

> ‘These Black men,’ said the landlord lowering his voice. ‘They’re looking for *Baggins*, and if they mean well, then I’m a hobbit. It was on Monday, and all the dogs were yammering and the geese screaming Uncanny, I called it. Nob, he came and told me that two black men were at the door asking for a hobbit called Baggins. Nob’s hair was all stood on end. I bid the black fellows be off, and slammed the door on them; …. (180)

宿屋の主人も、宿屋の従業員ノブも訪ねてきた者をフロドたち同様、‘black’を用いて表現している。彼らの様子は薄気味悪く、恐怖感を与える。

メリーが黒の乗手を見たことを皆に話す。メリーの話から皆はさらに恐怖感に襲われる。そして、戸外が暗闇に包まれたころ、フロドらが宿屋で寝る支度をしているときに、黒の乗手の気配を感じる。

> Fatty Bolger opened the door cautiously and peered out. A feeling of fear had been growing on him all day, and he was unable to rest or go to bed: there was a brooding threat in the breathless night-air. As he stared out into the gloom, a black shadow moved under the trees; the gate seemed to open of its own accord and close again without a sound. Terror seized him. (188)

次第に黒の乗手が近づき、何かが起こるのを感じるようになる。その予感は周りの風景や人々の精神的面も支配し、実際目にしていなくても恐怖感を感じるまでになる。とうとう、影が動いているのを見る。さらに夜がふけていき、黒の乗手が迫ってくる。

> There came the soft sound of horses led with stealth along the lane. Outside the gate they stopped, and three black figures entered, like shades of night creeping across the ground. (188)

彼らは足音も夜の陰が地をなくはうようにして入ってくる。三人の黒い人影が確認できる。宿屋の従業員ボルジャーが騒ぎ立てて、彼らが侵入してきたことを皆に知らせたため、彼らは逃げていく。

> Soon there could be no doubt: three or four tall black figures were standing there on the slope, looking down on them. So black were they that they seemed like black holes in the deep shade behind them.
>
> …Immediately, though everything else remained as before, dim and dark, the shapes became terribly clear. He was able to see beneath their black wrappings. … In their white faces burned keen and merciless eyes; under their mantles were long grey robes; upon their grey hairs were helms of silver; …. (207-208)

この場面で、フロドらは黒の乗手をはっきり目にしたことで、彼らの存在が疑いのないものとなる。このように、黒の乗手を表わすのに‘black’を多用することによって、恐怖感を増幅させていくのである。黒の乗手に関する描写は、色彩表現を用いたサスペンス的な物語技法である。

ところで、黒いマントの下に着ている長衣は灰色

であり、髪の毛も灰色である。長衣と髪の毛の色である‘grey’は、ガンダルフを象徴する色彩であり、フロドらを助けるアラゴルンの目の色などにも用いられているが、敵である黒の乗手に関する‘grey’の使用は、ガンダルフたちの使用とは正反対である。要は、ガンダルフとアラゴルンにおける善が、黒の乗手とその背後にある冥王サウロンにおいては歪められた善の力の行使であることを‘grey’に両義性を帯びさせることで象徴しているのである。

(7)グロールフィンデル

エルフのグロールフィンデルとは、フロドたち一行がアラゴルンと一緒に出発してまもなく風見が丘で出会う。

> The light faded, and the leaves on the bushes rustled softly. Clearer and nearer now the bells jingled, and *clippety-clip* came the quick trotting feet. Suddenly into view below came a white horse, gleaming in the shadows, running swiftly. …The riders cloak streamed behind him, and his hood was thrown back; his golden hair flowed shimmering in the wind of his speed, To Frodo it appeared that a white light was shining through the form and raiment of the rider, as if through a thin veil. (221)

最初、フロドは音が聞こえてきて馬の姿を見る。その後薄暗がりの中、グロールフィンデルが徐々に姿を表わす。白い馬に乗り、白い姿をし、白い光に照らされている。彼はエルフであり、すべて白色であるため、妖精エルフとしての清らかさが現れている。またグロールフィンデルの金髪は白に生えて、さらなる美しさを増し高貴な印象も付加している。

フロドたちは、黒の乗手の気配を風見が丘で対決するまで感じ続け、風見が丘でエルフのグロールフィンデルが登場した後、黒の乗手が襲ってくる。

> He could see them clearly now: they appeared to have cast aside their hoods and black cloaks, and they were robed in white and grey. Swords were naked in their pale hands; …. (226)

グロールフィンデルは白い馬に乗っているのに対し、黒の乗手は黒い馬に乗っており、善と悪の象徴となっている。黒の乗手は黒いマントを脱ぎ捨て、黒の不気味な印象から白と灰色の長衣に変わる。

黒の乗手と戦い、負傷し、苦しんでいるフロドに黒の乗手は容赦なく襲ってくる。その時、白い馬に乗った白い乗手が現れ、最後は、黒の乗手は川に沈んでいき、姿を消すことになる。‘white’もまた‘grey’同様に、善と歪められた善の両方を象徴する色として用いられているのである。

フロドたちはグロールフィンデルの案内で、裂け谷にある「最後の憩」館に到着し、そこで開かれた会議によって今後の彼らの旅の目的が明確になる。

「最後の憩」館の大広間に大勢の人が集まる場面で、一段高いところに館の主人のエルロンド、その両隣りにグロールフィンデルとガンダルフが座っている。まず、ガンダルフの描写があった後、もう一方側にいたグロールフィンデルの描写となる。

> Glorfindel was tall and straight; his hair was of shining gold, his face fair and young and fearless and full of joy; …. (239)

グロールフィンデルの顔は年輪を刻んだガンダルフの顔とは対照的に若々しくて美しい。髪の色は彼が最初登場したときに印象的であった金髪である。これもガンダルフの白い髪に比べて輝きがあり、若々しさが溢れ、不死なる存在であることを象徴しているのである。

(8)エルロンド

次に「最後の憩」館の主人、半エルフのエルロンドの姿が描写されている。

> His hair was dark as the shadows of twilight, and upon it was set a circlet of silver; his eyes were grey as a clear evening, and in them was a light like the light of stars. (239)

まず、黒い髪の毛の様子が、次に灰色の目の様子

が描写されている。夕闇の影のような黒髪に、目は晴れた夕暮れのようで、また星の光の輝きのような明るさを印象づける灰色である。どちらからも夕暮れを連想させるが、暗い夜をむかえるような夕暮れではなく、明るく美しい夕暮れを表わしている。

(9)アルウェン

エルロンドの館の大広間において登場する主たる人物の最後は、エルロンドの娘アルウェンである。

> Young she was and yet not so. The braids of her dark hair were touched by no frost; her white arms and clear face were flawless and smooth, and the light of stars was in her bright eyes, grey as a cloudless night; yet queenly she looked, and thought and knowledge were in her glance, as of one who has known many things that the years bring. Above her brow her head was covered with a cap of silver lace netted with small gems, glittering white; but her soft grey raiment had no ornament save a girdle of leaves wrought in silver. (239)

アルウェンの描写は、他の登場人物と比して、丁寧で、色彩表現も細やかである。フロドは今まで見たことがないような彼女の美しさに感激する。

彼女の描写の特色として、無彩色である‘grey’や‘white’などが頻繁に使われていることである。アルウェンの場合もエルロンドの場合と同様、まず黒い髪の描写がある。彼女の髪には一筋も白いものがなく、若々しく見える裏付けとなっている。さらに腕の色‘white’は、彼女の晴れやかな顔の様子とともに彼女の若さと美しさと清楚さを象徴している。また、灰色の目もエルロンドの目と酷似し、雲のない夜のようであり、明るく、星の光がやどった、混じりけのない美しい目である。また、彼女の衣装はやわらかで、飾り気がない。彼女がけばけばしくなく、素朴な様子を‘grey’を使うことで表現している。『旅の仲間』でアルウェンが登場するのはこの場面のみで、彼女は言葉を話すこともない。しかし、細かな描写によってアルウェンを強く印象づけている。彼女は『王の帰還』でアラゴルンと結婚する人物であり、この場面は物語の伏線的な役割を担っているのである。

(10)ギムリとレゴラス

エルロンドはフロドが会ったことがない人たちを順番に紹介していく。ここで後に〈旅の仲間〉の一員となるドワーフのギムリがまず登場する。しかし、彼の姿に関する詳細な描写はされていない。その次に紹介されるのが闇の森のエルフのレゴラスで、緑と茶色の服をつけた風変わりなエルフとして登場する。緑と茶色は木々を連想させ、エルフの住む森の国を象徴している。その後にボロミアが紹介される。

(11)ボロミア

ボロミアは、「最後の憩」館で指輪に関する会議が開かれたときにエルロンドからフロドに紹介される。

> And seated a little apart was a tall man with a fair and noble face, dark-haired and grey-eyed, proud and stern of glance. (253)

ボロミアの灰色の目の誇り高さときびしい光には、男性的な強さと威厳が表れており、アラゴルンの目に類似している。アラゴルンとボロミアは、やがて〈旅の仲間〉の一員としてフロドたちとともに指輪を捨てるための旅に同行し、フロドらを導いていく。

さらにボロミアの姿の描写が続く。

> He was cloaked and booted as if for a journey on horseback; and indeed though his garments were rich, and his cloak was lined with fur, they were stained with long travel. He had a collar of silver in which a single white stone was set; his locks were shorn about his shoulders. On a baldric he wore a great horn tipped with silver that now was laid upon his knees. (253)

ボロミアの装いは長旅のために汚れていたが、その部分の描写には色彩は使用されていない。しかし、彼の装いの特色となる白い石のはまった銀の襟かざりや銀の口金のついた大きな角笛に関しては色彩を

使用して詳細に描写されている。特に銀の口金のついた大きな角笛は、この後、フロドとサムが敵のオークに襲われているのをボロミアが見つけ、アラゴルンたちに助けを求めるときに吹かれ、物語の伏線的役割をするものとなる。また、ボロミアが現われたのは、まだ夜が明けきらないころ（grey morning）であり、ボロミアと‘grey’との関連性が見られる。

同じ人間であるアラゴルンとの姿の描写に共通しているのは、目の色が灰色であること、その目の描写の前に髪の毛(dark hair)に関する描写がされていることである。彼らは人間を代表する人物として登場し、〈旅の仲間〉の一員となり、他の仲間を率いていく。特に赤角山での吹雪の場面では、彼らは力を合わせて体の小さいホビットを守ろうと奮起する。

しかし、最終的に二人の運命は全く別の一途をたどる。フロドとサムが旅の仲間の前から姿を消した後、アラゴルンは先頭にたってフロドを捜して旅を続け、『王の帰還』では、フロドが指輪を棄却した後、アルウェンと結婚する。一方、ボロミアは指輪の持つ力の誘惑に負け、フロドから指輪を奪おうとする。寸前のところで我に返るが、自分が行ったことを後悔したボロミアは、姿を消したフロドとサムを守るために彼らを捜索する。そして、フロドたちが襲われているのを発見し、彼らを助けるために勇敢に立ち向かって最後を遂げる。彼らの目の色である‘grey’は、彼らの心の状態と運命を象徴している。

(12)オーク、ウルク、バルログ

モリアの坑道で迫ってくる敵はオークであり、中には凶悪な黒いウルクもいる。彼らは緑の苔をはやした黒っぽい皮膚で、フロドが剣を突き刺すと黒い血がしたたり落ちてくる。オークやウルクに関する描写に‘black’が使用されているが、これは、前述した黒の乗手のように悪の象徴となっている。そして、一行は大きなオークの姿を目にする。

> But even as they retreated, and before Pippin and Merry had reached the stair outside, a huge cor-chieftain, almost man-high, clad in black mail from head to foot, leaped into the chamber; behind him his followers clustered in the doorway. His broad flat face was swart, his eyes were like coals, and his tongue was red; he wielded a great spear. (339)

彼らの全身が黒に覆われている様子は、これまでの彼らに関する描写からも連想でき、この場面でさらに強調されている。そして、あらゆるものが黒い中、舌の赤色だけが目立っている。

その真ん中に黒い姿があり、黒い煙が立ち込めて来る。一行は、バルログが現れたことに気づく。そしてバルログとガンダルフが戦い、ガンダルフが橋から転落して旅の仲間から離脱することになる。

(13)エルフ

フロドたち一行はエルフの国ロスロリアンに入って行く。エルフの世界に到着すると目の前には灰色を帯びた景色が広がり、木々の幹も灰色である。そして、エルフの姿を目にする。

> … and out of a thicket of young trees and Elf stepped, clad in grey, but with his hood thrown back; his glinted like gold in the morning sun. (361)

姿を現わしたエルフたちは、影のように定かではない灰色の装束に身を包んでいる。彼らの装束の‘grey’はロスロリアンの景色の色と関係していると考えられる。周りの景色と同化することにより、エルフの存在が目立つことなく安全な状態となれることを意味している。また、頭巾をずらしているエルフの髪の毛の色は朝日を受けて金色に輝き高貴さを帯びている。そして、エルフの女王ガラドリエルと王のケレボルンの近くには三人のエルフがいる。

> Beside it a broad white ladder stood, and at its foot three Elves were seated. They sprang up as the travellers approached, and Frodo saw that they were tall and clad in grey mail, and from their shoulders hung long white cloaks. (369)

彼らの鎖かたびらの色も‘grey’であり、ロスロリアンの景色の色と同化している。さらに彼らは長

いマントを羽織っているが、その色は‘white’であり、彼らが護衛しているエルフの女王ガラドリエルと王ケレボルンの装いの色と同じである。護衛しているエルフの地位の高さを暗示しているのである。

(14)ガラドリエルとケレボルン

ロスロリアンのエルフの女王ガラドリエルは、王ケレボルンとともに登場する。

> Very tall they were, and the Lady no less tall than the Lord; and they were grave and beautiful. They were clad wholly in white; and the hair of the Lady was of deep gold, and the hair of the Lord Celeborn was of silver long and bright; …. (369)

ガラドリエルとケレボルンは二人とも装いは白ずくめであり、エルフの清純さを印象づける。彼らの異なる点は髪の色の違いである。ガラドリエルが金色であるのに対し、ケレボルンが銀色であるところからガラドリエルのほうが地位が高い印象を受ける。また、その後、彼女の登場のときは、丈の高さ、白い衣装、金髪の描写がなされている。

(15)ゴラム

『旅の仲間』では、ゴラムがはっきりと姿を見せることはないが、〈旅の仲間〉の人々は何か気配を感じるのである。

最初、アラゴルンはゴラムを捕まえたことがあることを話す。そのときのゴラムは、ぬるぬるする緑色のものでおおわれていた姿だったのである。

あるとき、サムが横になり、フロドは眠気と戦いながらがんばっていると、何かの姿が目に入る。

> Frodo was just yielding to the temptation to lie down again when a dark shape, hardly visible, floated close to one of the moored boats. A long whitish hand could be dimly seen as it shot out and grabbed the gunwale; two pale lamplike eyes shone coldly as they peered inside, … Immediately their light was shut off. There was another hiss and a splash, and the dark long shape shot away downstream into the night. (400)

ゴラムは『旅の仲間』において、直接、姿を見せたわけでない。表現する言葉にも明確な色彩表現はなく、‘dark’や‘pale’を使用することで「黒っぽさ」や「青っぽさ」など、どれもはっきりしない印象をもたらす。それは、フロドたちがゴラムの姿をはっきり見たわけではないからである。ゴラムは『ホビットの冒険』でビルボとのなぞなぞ対決に負け、指輪を手放した生物であり、『二つの塔』以降では、フロドらの前に姿を現わして多大な影響を及ぼす生物となる。そのため、『旅の仲間』におけるゴラムは物語の伏線的な役割を担う存在となっている。

結論

色彩の使用頻度に関して言えば、最も多く使用されているのが、‘black’である。これは、黒の乗手などの敵に関する描写が多くなっているからである。彼らを直接目にすることがなくても、彼らがいる気配を感じるときの描写として用いられている例も多い。次に多い‘white’はエルフの装いに関わる使用が多くなっているが、鬚の色や肌の色、顔色など身体の特色を表わすのにも使用されている。また、‘green’と‘yellow’はホビットが好み、装いに用いている色である。この二色に関わりがある人物は、トム・ボンバディルと妻ゴールドベリである。彼らに関する両色の使用によって、ホビットのフロドたちと読者に安心感を与えることになる。しかし、作品全体では、両色は意外に使用されていない。これは、‘green’と‘yellow’が迷彩色であり、森や木々を連想させる色彩であることから、特定の人物描写と関連する場面で効果的に用いていると考えられる。また両色は、トム・ボンバディルたちに使用することで明るい印象をもたらしており、冒険物語の厳しい情景には合致している色彩とは言い難いが、物語展開上においてフロドたちと読者の緊張感を解く大切な役割を果たす人物たちの色彩である。

『旅の仲間』に見る人物描写は、『指輪物語』の第一巻として物語全体の流れを作る重要な役割を担っている。特に人物の登場場面には、多くの色彩が丁寧に使用され、様々な効果を発揮している。

第一に、作品の中心的主題の一つである善と悪が巧みに表現されている点である。それは、特に‘black’、‘white’、‘grey’の無彩色の使用が効果的であることにも関連していると考えられる。さらに、各登場人物にはそれぞれの特色、役割など彼らを象徴する色彩があり、善の象徴、悪の象徴へと結びついている。たとえば、‘black’は、黒の乗手など悪や敵に関する使用が多く、また何場面にも亘って用いられ、サスペンス的な物語展開になっており、だんだんと強くなってくる恐怖感は、登場人物だけでなく、読者も体感できる。‘white’は純粋さや高貴さを印象づける色彩として使用され、特に女性の登場人物には必ず用いられており、女性の気品や美しさなど、女性に対する敬愛の念も含まれていると考えられる。‘grey’は目の色や装いの色を通して、信頼の妥当性を表わしたり、また、エルフの場合は、周りの背景と装束とが同色であり、信頼の妥当性に加え、安心感や安全性、機能性も示している。ボロミアの場合は、フロドは何度か疑わしさを抱いていたが、最後、指輪の誘惑に負け、フロドに襲いかかり、〈旅の仲間〉の離散へとつながる。

第二に、色彩を使用している場合と使用していない場合の意味合いである。これは作者トルキーンの意識的な企図であると考えられる。色彩を使用している場合、目や髪の毛など身体的な特色から始まり、装いの色が詳細に描写されている。その表現により、登場人物の存在を強調し、他の人物たちとの類似性と相違性を明らかにし、物語の伏線的な役割を果たすなどの物語展開に与える影響を読み取っていくことができる。一方、この作品では、集中的な色彩描写を使用せずとも、それまでに何らかの形でその登場人物に関する色彩表現が見られる箇所が多い。そのため、その登場人物への印象は強く印象づけられていくことが可能である。

第三に、色彩表現が用いられている箇所は、第三者の視点ではなく、フロドの視点からのものが多いことも特徴である。これは、『指輪物語』の最後で明らかとなるが、この旅の出来事は、フロドによって本にまとめてられる設定であるということと、フロド一人の視点を通して色彩表現を行うことによって、色彩の持つ印象や意味合いを固定する効果を狙っていると考えられる。

このように『旅の仲間』に見る人物描写に関する色彩表現は、長編である『指輪物語』の最初の巻として、また人気を博した『ホビットの冒険』の続編として、トルキーンの作家としての巧みな物語技法と芸術的感性を活かしながら、善悪の葛藤のテーマはもとより登場人物の特色を明確にし、彼らの魅力を引き出したり、存在感を強調したりするために、細心の注意が払われていると言えるのである。

〈使用テキスト〉

Tolkien, J. R. R. *The Fellowship of the Ring*, Second Edition. Boston: Houghton Mifflin Company, 1982.
Tolkien, J. R. R. *The Hobbit.* Boston. Houghton Mifflin Company, 2001.

〈参考文献〉

Shippey, T. A. *J. R. R. Tolkien: Author of the Century.* London: HarperCollins Publishers, 2001.
Zimbardo, Rose A. and Isaacs, Neil D. eds. *Understand -ing The Lord of the Rings: The Best of Tolkien Criticism.* New York: Houghton Mifflin Company, 2004.

ハンフリー・カーペンター著／菅原啓州訳『J. R. R. トールキン 或る伝記』、評論社、1982 年。
マーク・エディ・スミス著／斉藤兆史監訳、三谷裕美訳『「指輪物語」の真実』、角川書店、2003 年。
ラルフ　C. ウッド著／竹野一雄訳『トールキンによる福音書』、日本キリスト教団出版局、2006 年。
コリン・ドゥーリエ著／田口孝夫訳『トールキンハンドブック』、東洋書林、2007 年。
川原有加「『ニグルの木の葉』についての一考察――＜準創造者＞としての芸術家――」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要第 8 号』、2008 年 2 月。
（出版年順）

(Received:September 30,2009)
(Issued in internet Edition:November 1,2009)